

## 最近のリオデジャネイロ

さくら い ま さ け  
桜 井 雅 夫

リオに着いてまず見つけたのは、ありとあらゆる壁—家の壁、塀、石山の表面、土手の表面、さらに電信柱や木の幹などに書かれた白ペンキ、黒ペンキの落書きである。しかもほとんどが政治に関するものである。

JK 65 (1965年の大統領選挙にはジュセリーノ・クビシェッキを)

CL 65 (同じく、カルロス・ラセルダを)

VIVA BRIZOLA (レオネル・ブリゾーラ万歳)

O POVO QUER A EMENDA CONSTITUTIONAL  
(国民は憲法改正を望む)

などはその代表的なものである。滞在が1カ月、2カ月とたっていくうちに、こんどは落書きと同じたくいのポスターがやたらに目にはいつてくる。

何かこの国は「政治」が空回りしている感じである。というのは、こうした政治家グループの吹く笛に合わせて踊らないリオ市民がたくさんいるからだ。それでも連邦上院議場でペリクレス議員がカイララ議員をピストルで射殺した事件のあったときばかりは、リオの人たちも日頃の議会へのアパシーを捨てて新聞の掲示板の前に人垣をつくっていた。ケネディ大統領死去の報道の際にできた人垣は本当にブラジル人の悲しみと怒りを表わしていたけれども、ブラジリアのピストル事件への関心はむしろ野次馬的なものだった。

政治に無関心なのは、かれらに言わせると、いまの政治家はみなうそばかりついて信用ができないからだそうだ。ブラジリアをつくったクビシェッキは土建屋とむすんで金をもうけただけだし、ジャンゴ現大統領はどこにもいい顔をするだけで何もやっていないし、ブリゾーラは「コムニスタ」だからきらいだと言う。かれらにわずかに人気のあるのは地元のラセルダ知事だけである。ノルデステからの労働者がふえているとはいえ、まだリオはおとなしい気質のカリオカの地盤である。かれらには「保守」政治家がむいているのかもしれない。このあいだ、かれらにわたくしが「ラセルダにはイデオロギーがない」と言ったものだから大変なことになり、翌日道端

でかれらの仲間につるし上げを食った。リオでも日本と同じで進歩的といわれる知識人や学生たちのあいだではラセルダは保守反動のかたまりとよばれている。リオのカソリック大学にいるわたくしの友人は、全学連(União Nacional dos Estudantes, 略して UNE)に属しているが、かれらには人民動員戦線(Frente de Mobilização Popular, 略して FMP. 左翼の一大連合体)に属していない政治家は全部失格なのである。このあいだは、リオにあるブラジリア大学の Faculdade Nacional de Filosofia(略して FNFi)の新聞学科の卒業式に大学当局から来賓として招待されたラセルダ知事に向かって学生たちが、招待規定にある学生の過半数の承認がなかったとして、ピケをはり、石やビールびんを投げ、警官・憲兵隊が出動し大変なことになった。この事件はラセルダと、UNEの後押しするFNFiとのあいだでいまだに結着がつかない。

それでも、リオの一般の人気はやはりラセルダに集まっている。かれは1965年の大統領選挙に出馬するが、対立候補にはクビシェッキのほか、アデマール・デ・バロス現サンパウロ州知事、宗教関係のザルールなどがいる。昨年初め、サンパウロで行なわれた大統領選挙の世論調査ではクビシェッキが85%の支持率を得たが、ラセルダはこのときわずか3%であったと記憶している。最近のアメリカ週刊誌 *Time* (ラテン・アメリカ版)もやはりクビシェッキの圧倒的人気を報道している。しかし、リオに関するかぎりこうしたデータはあてにならない。リオではラセルダがまず大半を掌握している。最近クビシェッキの出身地であるミナスジェライスでやはり大統領選の世論調査が行なわれたが、なんとラセルダ支持は80%であった。次期大統領にだれが選ばれるか、その形勢はいまやこんととしてきた。一外交官は、65年はクビシェッキで、そのつぎの大統領にラセルダがでてくる、とうがった見方をしているが、これとても確たる根拠はなさそうだ。

上にあげた落書き、O POVO QUER A EMENDA CONSTITUTIONAL というのは、いまさかんに議論されている農地改革と関係しているものである。ジャンゴの看板である「根本改革」(Reforma de Base)の一環としての農地改革は、例の土地収用法によっていまや大きくクローズアップされている。この土地収用法は、ブラジル国道沿線一帯の有閑地を収用するというものだが野党の民主社会党(Partido Social Democrático, 略して PSD)や土地所有者たちは、本法律を違憲としている。

一方、改革を求めるグループはそれなら該当する憲法条文を改正しようというわけである。憲法改正など試みても、そんなに簡単なものでないことは、この前の大統領内閣制から議院内閣制に移行した際の苦い経験がよく示している。グループは例によって各党派の様子をみており、いまやその意見調整の最終段階にはいった感じで、わたくしのこのレポートができあがるころは改憲なしに法案署名が終わっているかもしれない。

大統領選挙にせよ、根本改革にせよ、それに関する報道はそれぞれかたよったものが多い。しかもブラジルには日本のように全国紙というものがないから、リオの新聞だけでは、たとえば一方の雄であるサンパウロの状況など正確にはわからない。サンパウロに行ったらおそらくラセルダ支持はリオとまったくちがうであろう。とにかくたくさん新聞がリオにはあるが、そのいずれがより多くの真実を伝えているのであろうか。ジャンゴ派の新聞 *Ultima Hora* とラセルダのもっていた *Tribuna da Imprensa* は犬猿の仲である。*Ultima Hora* は、太陽は東からのぼる、と言え、*Tribuna da Imprensa* は、いや太陽は西からのぼる、と言いかねない。現在、リオではよく水がとまったり、水が足りないから停電するが、*Ultima Hora* は、水がとまればラセルダが悪いからだと言ひ、停電すればラセルダが何もしないからだと言ひ攻撃する。リオの不満はみなラセルダのせいにする始末である。*O Globo* も右派の新聞なので *The Globo* の異名がある。

とにかく、水がよくとまることは事実である。それでも、ほかの地区に水がなくてもジャンゴのいるランジェイラス官殿とラセルダのいるグアナバラ官殿のあるランジェイラス地区だけは水が絶えたことがないと言ひ肉人もいふ。コパカバーナでは昔からの水道管を使っているせいもあって、ひどいところでは週に2、3回とまっている。最近とうとう政治の落書きにまじって、

AGUA (水)

CADÊ A AGUA (水はどこだ)

という落書きがお目見えした。リオブランコの通りでも見たが、やはりコパカバーナに多い。リオの水道の水は東京の澄んだ水のようなものはない。赤くにごった水で、現地の人はそのまま飲んでいるが、わたくしなどは濾過器 (filtro) をとりつけて飲料水にしている。それでも面倒くさいときは、サンパウロから送られてくる極づめの飲料水 (agua natural, agua mineral) を買っている。ブラジル人はわたくしたちがこういう飲料

水を飲む代わりに生ビール (chopp) を飲んでいる。若いときからあのようにおなかでている人が多いのはそのせいかもしれない。

水と電気がとまると思うと、こんどはガスがとまっている。アパートの前の住人が先月分のガス代を払わないのでとめられたかもしれないと思ひ、シタバしてはじまらないと悟って外へ出たら、新聞がいつせいにリオデジャネイロ・ガス (Société Anonyme du Gaz de Rio de Janeiro) のストを報じている。大きなガスタンクには “ESTAMOS EM GREVE” (スト決行中) のビラが貼られている。この会社は電力・ガス・電話企業をいわば独占するカナダ系のライト・グループ (Grupo Light) の所有であり、ストがこじれるとライト・グループはいつせいにストにはいるかもしれないと言ひラジオは報じている。現に、電話は市外・長距離はすでにとまってしまった。物価倍増にもかかわらず、倍増するはずの最低賃金の具体的な数字がいまだにきまっていないのだから、ストがおこっても当然である。警官と憲兵が現在このストの警戒に半分以上が動員されている。ジャンゴも韓旋にのりだしたが、組合側は公権力の不当干渉だとハネつけている。一方では、このストと時を同じくして郵便局と政府下部機関 (autarquia) が、政府が約束した昨年の13カ月目給料 (salário décimo-terceiro) をいまだに払わないとして、これまたストにはいった。払えない公務員のための salário décimo-terceiro など約束する政府もどうかと思う。カルヴェーリョ・ピント蔵相が辞任した理由の一つが、公務員への salário décimo 支払いのために必要な紙幣増発に不満をもっていたからである。とにかく、ガスのストップでリオの台所で女性群は失業状態、わたくしたち外食者も店で食べられるものは炭火でできる料理だけとなった。しかも異常乾燥 (sêca) で今年は米がとれなくなることがはっきりしてきたので、リオでも米の買いだめが始まっている。農村地帯では食料がなくなり、市内になだれ込んで食料略奪をやったり、役所に嘆願にでかけたりしている、と新聞が報じている。豊かな資源をもっているのにまったく「不思議なブラジル」(Times, 1962. 12. 23) ではある。お米の心配をしながら炭火でつくられた夕飯を、暗いローソクの灯のもとで食べているひとりの日本人派遣員がここにいる。ブラジルの誇る「近代都市」リオデジャネイロでようやく低開発国にいる実感がわいてくると同時に、日本の戦後の暗い日々を想い出し、なにかわびしくなった。「水がない、電気がない、ガスがない。おまけに肉がない、牛乳がない

い。いったいどうやって生きていけというんだ」。暗やみでだれかがこう叫ぶと「ずいぶん経済的になるよ」とゆっくり答えるものがいた。

一般の感じでは、水、電気、ガスと一度に重なってしまっても、リオの人たちはなおも平然と生活しているようにみえる。最近、身をもって体験していることであるが、こうでもしていないとリオでは外国人は体が続かず寿命が縮まるのではないだろうか。マイアミでヴァリギ(VARIG)でリオに向かう途中、ベレンから乗り込んできた若者がわたくしとなりの席に座ったが、生まれてこのかた、あのときほど気だるさを感じたことはなかった。あの暑いなかで、ひとときも席にじっとせずゆっくりと動きまわり、酒をのみながらノルデステなまりでだらりだらりとしゃべりつづける。ところどころにゆっくり回転させたテープレコーダーのような音で笑い声をはさんでいく。何を言っているのかほとんどわからないわたくしにとって、長旅の疲れも手伝ってか、ブラジリアで別れるまでのかれはまさに恐怖のかたまりであった。リオに着いた直後は東京システムでバリバリと仕事を始めたが、いくらボールを投げても相手が受けとめてくれない。本当にイライラしたが、幸か不幸かこのごろは悟ったような枯れたような気持ちで時を過ごしている。

こうしたゆるやかなテンポに逆行するのがリオの乗合バス(lotação)である。混み合う車の間をぬって素っ飛ばすすがたは、外国人のわたくしにとって、日本のダンブカーなど問題にならないほど、身体の危険を感じさせる。いっしょに車に乗った前駐日公使のマルチニョさんが「カミカゼ」タクシーのほうがかわいと言っていたが、わたくしはそうは思わない。一外国人がこれを見て「ブラジル人はふだんゆっくりしているからそれを取り返すためにあんなにとばすのだろう」と言ったと朝日新聞の特派員は報じているが、何も知らない人にはこんなふうにも見えてもしかたがない。わたくしもはじめはどうしてあんなに飛ばすのかわからなかった。運転手の席には“FALE A MOTORISTA SÔMENTE O INDISPENSÁVEL”(必要な人以外、運転手に話しかけないで下さい)と書いてあるが、いつか空いているときに乗って、飛ばすわけをきいてみようと思うと友だちに話したら、そんなこときいたらすぐさま車をとめて君をなくさるだろう、と注意してくれ、運転手に代わって真相を話してくれた。つまり、与えられた運転区間を一日何回往復するかで給料がきまるのだそうだ。これはかれらにとっては死活問題であり、だから1秒もむだにできないの

だ。乗り降りの際にも完全には停車してくれないから、うっかりすると足を踏みはずす。そこで乗降口のデッキにしっかりつかまると、デッキが感電していることがある。みんなが文句をいうので最近ではビニール・テープやエボナイトでデッキが包まれている。しかし、いったん乗ってしまうと痛快なくらい早く目的地に運んでくれるのでよく利用させてもらっている。でも車掌がないから曲る際など注意していないと、スピードが落ちないから足を組んで坐っただけのようものならすぐさま席から落ちこちってしまう。このlotação、排気ガスの長い管を空に向けて走っている。なぜかと聞いてみたら、下に向けて出すとこれを吸った人道の人たちがガンになるおそれがあるからだそうだが、するとこんどはアパートの上のほうに住んでいる人がおれたちはどうしてくれるんだとさわざだした。リオのlotaçãoも今年からは大きなônibusにとり換えられるそうだ。

車で思いつくことだが、リオの若い人たちにとって最大の関心事の一つは、政治や経済のことよりも、車と複数のガールフレンドをいかにして獲得するか、ということである。ブラジル地理統計院(Instituto Brasileiro de Geografia e Estatística、略してIBGE)の統計学者に言わせると、リオの若者たちに関するかぎり、男性1人に女性7人の割合だそうだ。大学生たちも同じようなことを言っているので本当かもしれない。ともかくわたくしとまじめな大事な話をしているときでも、女性が歩いてくると話をやめてかの女に何かぶつぶつ話しかける。不思議なのは、通り過ぎたあとで、またわたくしと話を続けるとき話の筋がどこまでいったかを忘れずにいることだ。車のほうでは、ブラジル自動車(Fábrica Nacional de Motores、略してFNM)を除いてあとは全部外国系企業——メルセデスベンツ、ウィリス、フォルクスワーゲン、ルノーなどであるが、かれらにはそんなことはどうでもよく、とにかく車を持つことがプライドのバロメーターになる。「車を持っている」ということが必要なのである。日本ではもう見かけない1940年ごろのフォードやモリスがキシキシと音を立てながら堂々と走っている。わたくしはブラジル銀行(Banco do Brasil)の職員と友だちになったが、かれは給料が安いので車の売買をやって小遣い(bico)をかせぎ、これで自分の買ったフォルクスワーゲンの月賦の支払いにあてている。やはり銀行マンである。このかれが教えてくれた文句にこんなのがある。

—Como vai MERCEDEZ? BENZ?

## 現地報告

—A vida é a SIMCA. A gente NASH,  
KAISER, MORRIS.

ごらんのとおり、単語の発音と意味をうまく車の名前に似せて作った文句で、ブラジル語にすると、

—Como vai Mercedes? Bem?

—A vida é assim. A gente nasce, casa,  
morre.

—どうだいメルセデ君。元気かい。

—なにこのとおりさ。生まれて結婚して死ぬだけさ。

となる。こんな文句が、若者たちの車へのあこがれをよく示している。

外国企業が独占している部門には自動車工業のほかは薬品工業がある。買った薬をみるとたいていアメリカやスイスの商標がはいっている。ナショナリストたちがこれを問題にし、“Vamos nacionalizar a industria farmacêutica”（薬品工業を国民化せよ）というプロパガンダを始め、虎視たんたと機をうかがっている。石油部門も相変わらず外国資本排斥運動が盛んである。ペトロbras (Petróleo Brasileiro S. A., 略して PETROBRÁS) は1月はじめ、昨年度の営業報告を発表したが、これによると同社が取引を行なった石油および石油製品は金額にして4370億クルゼイロで1962年の81%増加となっている。またその利益は650億クルゼイロで1962年の51%増加となっている。しかし、これはとうていペトロbrasにとって満足できるものではない。国営産業としてのペトロbras育成のためにはどうしても並存する外国系石油会社が弊害となっている。昨年12月末石油および石油製品輸入の国家独占に関する大統領令がでたが、これで外国資本締め出しが一步進んだことになる。最近またつぎのようなポスターがびっちり貼られた。

Está na hora do monopólio integral. Tudo de petróleo para a Petrobrás.

(いまこそ独占のとき。すべて石油はペトロbrasに。)

このポスターの絵ではテキサコがシャベルで掘り捨てられている。こうした現連邦政府のプロパガンダも、ラセルダ派に言わせると、みんな brincadeira (ざれごと) にすぎないそうさ。なぜかと聞いてみたら、ジャンゴには方針がないから、きょうは petróleo brasileiro などと言っても、あすになれば petróleo americano と言いなおすというのである。わたくしはこれを聞いて、外国資本に対する「ブラジル」の態度、などという言葉を使

う自信がなくなってきた。ウジミナスや石川島も、こうした連邦政府や州政府の一挙一動にさぞや苦勞をしておられることだろうと改めて考えさせられた。

日本に関するリオの人たちの知識は、一部を除けば、まだまだといったところ。よくきかれるのは日本の「ハラキリ」のことである。この“Haraquiri”という単語はすでにブラジル語になってしまった。日本の『広辞苑』にあたるような *Pequeno dicionário brasileiro da língua portuguesa* をひいてみると「短剣または長剣にて腹部を切裂することによって行なわれる自殺」と書かれている。ブラジル語では“Haraquiri”の“H”が発音されないので「アラキリ」とかれらは言う。日本にはいまでも「アラキリ」があると思っている人がたくさんいる。今月もリオで日本映画「切腹」が上映されているので一段とわたくしへの質問が多くなった。2月はカルナバルの月、このカルナバルの歌にも「アラキリ」がとり入れられている。

Coitada da Madame Butterfly

Ficou com um menino

Esperando pelo pai

Amor lá no Japão

Não é como aqui

Quando há decepção

Tem que fazer o haraquiri

Japonês vai ficar por aqui

意味はこんなことらしい。

蝶々さんはかわいそうに

おいてけぼりになった

お父さんを待つこどもといっしょに。

恋は日本ではここ（リオ）とちがう。

だましたことがバレたら

腹を切らなければならない。

だから日本の男はここに残っているのさ。

これを友だちがみんな歌って腹を切る真似をしながら踊ってみせる。ちょっと複雑な気持ちになった。

どこの外国でも同じようなもので、かれらの頭のなかには、「アラキリ」も「カミカゼ」も「ソニー」も平然と両立している。日本のトランジスター・ラジオの人気はすばらしい。各社の製品がはいってきているが、ほとんどが密輸で無茶な値段がついている。ブラジルでもフィリップス、ジェネラル・エレクトリックなど外国系資本が製造しているが、日本製品には及ばない。リオにはメズブラ (Mesbla) というデパートがある。東京でソニ

ーが販売提携をしていると聞いてきたので行ってみたらそんな名前は知らないと言い、世界で一番いいトランジスター・ラジオはブラジルの製品だといって上記の会社のラジオをみせておきながら、別れぎわに小声で神妙な顔をして、もし日本のポケットラジオを持っていたらおれが買うから、だれにもゆずらないでくれ、と言った。

リオにきて奇妙に感じたことの一つだが、老いも若きも、男も女も、歩きながら休みながらバスに乗りながらいつもトランジスター・ラジオを持っている。その数が多いのである。わたくしのアパートのまわりの門番 (porteiro) たちなどは、朝から夜まで片時も離さない。そのうちにかれらは金がたまったら日本のマイクロテレビを買って、門の番などそっちのけにしてマイクロテレビをかかげて歩きだすかもしれないよ、とぼくの友だちはその真似をしてみせた。

こうしてラジオを楽しむ時間があっても、かれらはわたくしと約束した仕事を1週間たっても10日たっても、いつも返事は「明日やる」と言うだけ。アパートの壁となりのアパートの汚水が大きくしみてきて1メートル四方にカビが生えてきたのである。門番といっても建物の雑事はまかされている。なにかにつけて金を渡しているのだが、今度ばかりはわたくしに責任がないので金を渡さずついに建物の管理人 (síndico) とアパートの持主 (proprietário) に抗議を申し込んだ。やっと動きだしたが、それでも水道工事屋 (bombeiro) は約束の日を過ぎてもいまだにやって来ない。先月、東京をたつときに送った船荷が何者かに開けられてリオの税関にはいった。保険会社と立ち会いで本人が開けたかったらまた3カ月あとに来いと言う。わたくしは、地球の裏までとにかく着いてくれたことに満足し、その場で受けとった。このあいだも、東京からの小包が着いたので港の郵便局へ取りに行ったが、大使館気付の荷物は特別扱いだということで手続きが簡単になるのかなと思っていたら実はそうではなかった。各係員がゆっくりと引換証にサインしてまわる。ここまではどこかの国に似ているが、このあとがちがう。やっとわたくしの荷物を渡す係員のところまできて、わたくしの番になって目の前に荷物があるのに、係員はタバコを吸いに行ったり、カフェを飲みに行ったり、知り合いの女性が来ると何をおいても握手に席をたって何か話している。郵便局に着いてから約1時間たった。ほかにも大勢待っているが、かれらは平然と待っている。小次郎が敵流島で武蔵に4時間待たされたことを思いだし、おれも修業の身、やってやれないことはない

と自分に言いかけ係員と根くらべをすることにした。さきほど、いっしょに待っていたカソリックの神父さんがうまく列の前のほうにわりこんでさっさと自分の荷物を受け取って出ていった。兎禰 (とね) に九州で洗礼をうけさせたのはあんな神父さんなのかな、などと考えているうちに、それから30分後ようやく係員がわたくしの荷物に手をかけた。おもむろに包みを開け、ゆっくりと検査を終わり、わたくしは郵便局到着後1時間35分にして東京で使っていた替えズボン4本を受け取った。現地の説明をするのにサムライの話を出すのはどうかと思ったが、西洋の経済学でも孤島のロビンソン・クルーソーの話を使っているのだから、わたくしが実在の島の実在の人物の話をもちだしても悪くはないだろう。

「サムライ」や「ソニー」が話の糸口になって、大学の友だちのほかにも、町にずいぶん仲間ができた。ドイツから逃げてきて手細工の職人をやっているユダヤ人。日独伊3国同盟のよしみだといってカフェをおごってくれるイタリー人の金物屋。わたくしのことを Sr. Japão とよぶ時計専門の密輸船員。それでも町の友だちの大半は若い人たちである。おたがいに名前を紹介しあうが、耳に愉快にひびくのがある。アルキメデスが島の種まきだったり、ナポレオンがコーヒー・スタンド (bar) の店員だったり、ドン・ペドロがただの高校生だったりする。ジャニオ・クアドロスが大統領になったとき、生まれた児に大統領と同じ名前をつけた親がたくさんいたが、かれが突然辞職したので役場に改名届が殺到したそうだ。なつかしのニューヨーク、アイドルワイルド空港もこんどケネディ空港となったが、ブラジルのエスピリトサント州でもかれの死を記念してジョン・ケネディ郡が生まれた。リオには「さよなら」という名の品物がある。日本風のゴムぞうりのことである。きいてみると「さよなら」と名のつく日本風の品物が、まだほかにもあるそうだ。

コパカバーナには高層建築のアパートがぎっしりつまっている。これらの全部のアパートからいっせいに人が出てきたら、道は完全に人で氾濫するにちがいない。アパートの建物には非常階段などついているものは少ないので、不慮の事故がおきたら、と考えたらわたくしはゾットした。このあいだも町の高い建物で火事があり、窓から逃げようとして落ちて死んだ人がいる。アパートを盗難から守っているのが鍵である。リオは鍵がなくては夜の明けぬ町である。日本の団地などの比ではない。玄関の鍵、居間の鍵、寝室の鍵、台所の鍵、タンスの鍵、

車の鍵……。このたくさんの鍵を手のひらでたたいてすばらしいサンバのリズムを奏でてくれる。その音をきいてまわりのものが踊りだす。学生たちの話だと、以前はマッチ箱を爪でたたいてやっていたのが、ライターの普及で楽器はマッチ箱からキーホルダーに移行したのだそうである。キーホルダーのリズムをつくりだしたのがボサノバの発祥地と同じブラジル大学法科大学(Faculdade Nacional de Direito)の学生だというから驚いた。ここは学問の名門として知られているからである。

世界のコパカバーナもそばで見ると、ゴミと落書きでとてもきたない。自分の家のなかだけはとにかく金をかけてきれいにしているが、一步外へ出たらまったく無神経にゴミをちらかす。日本でもこれほどひどくはない。歩いていると20階ぐらいのアパートの上から長い棒が落ちこちてきてケガをしたり、火のついたタバコが落ちてきたり、新聞紙に包んだ大きなゴミが頭の上に捨てられてきたり、まったく油断がならない。寸分のスキもない紳士がアイスキャンディーを買ってその包み紙をぼんと捨てるすがたはまったく奇妙である。毎日“Ajudem, estamos limpando a cidade”(清掃車にご協力下さい)と書いた車がやってくるが、ゴミの回収はとても間に合わない。落書きも歴史上有名な銅像の台などへ平気でやっつける。たいてい夜暗くなってからやるらしい。素敵な商店街のウィンドーや邸宅の塀など朝起きてみるとペンキで落書きが一杯。ラセルダ派の落書きもあるので州政府も取り締まることはできないのかもしれない。とにかく家のなかだけはきれいにして、あとは海岸にでかける。海岸に行っても泳いでいる人は少なく、みな砂浜でフットボールやバレーボールや日光浴をやっている。マイアミで知り合いになったガウショたちが、「ブラジルはビールと女性とフットボールの国だ」と教えてくれたが、そのとおりだ。朝から晩の8時ごろまで海水着すがたが絶えない。毎日海水着で町をぶらぶら歩いている男性がいるが、人ごとながら、この人は何を職業としていつ働いているのだろうと心配することがある。

外国人のわたくしにとってこのようなところと対照的な風景はファヴェーラ(favela)である。わたくしたちには例の「二重構造」として目に映るが、友人の学生がこれをきいていささか納得しがたいふうをみせた。かれに言わせるとファヴェーラにはそれなりの経済・社会の豊かさをもっているというのである。職業も男は自家営業から店員、人夫、女は家事手伝い、洗濯女、掃除婦などで、かなりのお金を持っている。しかも労働統合法があ

るから、女中さんなどは月曜日から金曜日まで以外に主人が使うときは、べつに高給を出すことになる。それでも土・日は働きたらずさっさとファヴェーラに帰っていく。このごろは通いの女中さんが多くなったようだ。そういえば港の人夫の給料などは最低賃金法に関係なくケタはずれの高給をとっているらしい。海運会社の人々が政府の無策をなげいていた。こうした事実を知りつつも、なおわたくしはリオの二重構造を否定することはできない。何かの糸口をみつめてファヴェーラにはいりこもうと思っただけはいるが、よほどブラジル人らしい印象を与えないと外国人がはいるのは危険であるといわれている。

おもしろいものを一つ。ブラジルに8年間住みブラジル国籍をとったハンガリー人ピーター・キレメン(Peter Kellemen)の書いた*Brasil para principiantes*の一節を紹介しよう。この本はブラジルのベストセラーで、このなかに、ブラジル人らしく思われたかったらつぎのような規則を守らなければならないと書いてある。

(1) 白の三つ組みか、それとも真新しいトロピカルを着ること。

(2) “não”という言葉を使ってはいけない。そういうときには“mais ou menos”, “é difícil”, “podo ser”という言葉を使うこと。

(著者注: “não” ははっきりと打ち消すもので、あとの三つははっきり打ち消さないあいまいな返事)

(3) 人に会ったらだれでも両肩をたたいて、親愛の情をもって抱きあう。そして“meu filho”(わが息子)と呼ぶこと——年齢には関係なく。

(4) カフェを飲むときは、コップに砂糖を一杯になるまで入れ、少しすくって受け皿に移す。時間があつたら砂糖つぼを頼んでもう一さじ入れる。カフェの泡を、注意深く、さじでとり去り、そして折れた楊枝のように体をまげてカフェを飲む。

(5) 連れのない女性に会ったら、いつも何かわからぬことを小声で言うこと、ただし勇気をもって。もし、かの女がはっきり気の弱そうだとわかる男を連れていたらかの女に熱烈なウィンクを送ってよろしい。もし、強そうな男といっしょだったら、またこのつぎにしなさい。

(6) カフェをおごってやろうと言われたら、「ありがとう、でももう飲んだから」などとはけっして言わないこと。昼食に招待されたら、いつも「ありがとう、でももう済んだから」と言うようになさい。

(7) 友だちといっしょにいるとき、すてきな女性かすてきてなくても胸のひらいた洋服を着た女性が自分の視

界にはいつてきたら、みんなに注意を喚起すること。

(8) 雨が降っても、帽子を使わないこと。たとえ持っ  
ていても家においておき新聞を頭にのせること。

(9) 何か人だかりを見つけたら、衝突だろうと事故だ  
ろうと、人垣に近づいて、すぐ感をはたらかせて、あれ  
が真犯人だと指さしながらすぐにどれでもいいから話し  
合っている仲間には入り込み、ほかの人たちにあとの行  
動をあれこれと指図すること。

(10) 車の鍵を手のなかでみせびらかすこと。とくにも  
のにしたい女性がそばにいたらそうしなさい。

わたくしはそのほとんどに同感して、思わず愉快にな  
った。蛇足かもしれないが、わたくしなりにもう二つば  
かりつけ足したいことがある。

(1) 食事をするとき、べつべつの皿に出された肉、  
野菜、豆、米、ファロファなどを一つの皿に入れ、全部  
ごちゃごちゃにまぜて、「グアラナ」をほんの少しずつ  
口にしながら、食べなさい。

(著者注：ファロファは、マンジョカの粉と肉・卵な  
どを加えバターでいためたもの)

(2) 話をするときは、金切り声と低音をはげしく交錯  
させ、ゆたかにアクセントをもり込んで、ときに早くと  
きにゆっくり、体操をしているごとくからだを動かして  
話すこと。

さいごに、同じこの本にのっている五つの質問を紹介  
しよう。日本の人たちが、もしこれに的確に答えられた  
ら本当のブラジル人とまちがえられるとこの本は言っ

ている。

(1) もし人に、「こんどわたくしの家に来たまえ」と  
言われたら、あなたは行きますか？

(2) もし人に、「そんなことはないさ」と言われたら  
あなたは信用しますか？

(3) もし人に、「4時に待っていてくれ」と言われた  
ら、あなたは信用しますか？

(4) もしフラ-フル戦で、「審判のミスジャッジだ、け  
しからん」と言われたら、あなたは同意しますか？

(著者注：フラ-フル—Flamengo-Fluminense, 略し  
て Fla-Flu—戦は、リオのフットボール最高のカー  
ドで、その日はファンが2分される)

(5) もし人に、「どうにかできるさ」と言われたら、  
あなたは確信をもちますか？

キレメンにあらためてきかなくても、わたくしのこのレ  
ポートを読んでくださったら、まず全部答えられるにち  
がいない。

〈あとがき〉

このレポートは、リオに着いて2カ月余り、停電と断  
水に悩まされながら、やや南国的になった頭のなかでや  
っと整理したものである。冗長とみえる箇所はまああ  
るけれども、「現地報告」にふさわしくありのままのす  
がたの一端は伝えることができたと思っている。

(アジア経済研究所海外派遣員)

—在リオデジャネイロ—

## 投資基準理論の展望

— 研究参考資料 第13集 —

福地 崇生 編

### 第1章 概 要

#### 第2章 社会的限界生産性基準 (SMP基準)

##### 第1節 チェネリーの分析, 第2節 SMP基準の変形

#### 第3章 限界再投資割合 (marginal per capita reinvestment quotient) の基準

##### 第1節 ガレンソン・ライベンスタインの分析, 第2節 ガレンソン・ライベンスタイン基準に対する 批判

#### 第4章 時系列基準

##### 第1節 概論, 第2節 センの分析[17], 第3節 エクスタインの分析[16], 第4節 ドップの分析, 第5節 投資効率と時間選好, 第6節 B・ホーヴァットの「吸収能力」と最適投資率

#### 第5章 均衡的成長と不均衡的成長